

18 当院における肝移植患者の予後

太田 宏信・丸山 弦・馬場 靖幸
林 俊彦・吉田 俊明・上村 朝輝
茂古沼達之*・武田 敬子*・遠藤 泰志**
石原 法子**・石川 達***
市田 文弘****

済生会新潟第二病院消化器科
同 放射線科*
同 病理検査科**
田代消化器科病院***
新潟大学第三内科****

〔症例1〕15歳，女性．溶血発作を伴う劇症肝炎型 Wilson 病で血漿交換を中心とする内科治療で改善後父親をドナーとする肝移植を施行．5年9ヵ月後の現在経過良好．

〔症例2〕52歳，女性．PBCでT.Bilが22mg/dlまで上昇し，98年9月息子をドナーに肝移植を施行した．移植後免疫抑制剤による腎障害，拒絶反応と思われる肝障害，PTLDと思われる肺病変を認め，現在も入院治療中である．

〔症例3〕56歳，男性．C型肝硬変にともなう原発性肝癌で娘をドナーに肝移植を施行．1年8ヵ月後の現在再発，転移は認めない．

19 当院から紹介した生体肝移植施行例の検討

畑 耕治郎・黒田 兼・小林 良太
古川 浩一・五十嵐健太郎・何 汝朝
月岡 恵・渡辺 徹*・新田 幸壽**
新潟市民病院消化器科
同 小児科*
同 小児外科**

1994年から2000年までにおいて当院から紹介した肝移植症例は小児4例（Byler病1例，先天性胆道閉鎖症1例，Alagille症候群2例），成人5例（原発性胆汁性肝硬変1例，アルコール性肝硬変2例，原発性アミロイドーシス1例，肝細胞癌1例）の計9例であった．Byler病とアルコール性肝硬変の1例は術後に死亡し，これらは術前からの多臓器障害併発や全身状態悪化例であった．9例中6例は肝不全や悪性腫瘍など生命予後が肝で規定される病態により移植適応となり，Alagille

症候群の2例は胆汁うっ滞による搔痒感と発育障害，原発性アミロイドーシスの1例は肝腫大による強固な腹部膨満感が移植適応理由となった．肝移植適応についての初回説明から最終同意時までにはほとんどの例で数ヶ月を要した．小児では全例インフォームド・コンセント（IC）の対象が両親でドナーも親であるが，成人ではドナーは親・子・同胞・配偶者など多彩で，ICにおけるキーパーソンを明確にしておく必要性があった．

20 当院における巨大肝嚢胞3例の治療経験

倉岡 賢輔・小林 由夏・埜 孝泰
松林 宏行・横田 隆司・飯利 孝雄
七条 公利

立川総合病院消化器内科

【目的】症状を有する巨大肝嚢胞3例に対し，ミノサイクリン注入療法を施行し，良好な結果が得られたので若干の考察を加え報告する．

【結果】ミノサイクリン注入療法を施行するに当たり，有害事象の発生は特に認めなかった．3症例のうち1例は著効，残りの2例は現時点では嚢胞の再膨張を来しているが，治療後初期には嚢胞が再膨張するといわれており，経過観察中である．治療効果の予測には嚢胞液中のCA19-9値が有用であり，更に効果判定に際して3ヶ月から，1年の観察が必要と考えられた．また嚢胞穿刺時に，経肝的なルートがとりづらく，心窩部等からアプローチするには嚢胞の縮小に伴いドレナージュチューブが逸脱する危険があるため，頻回の位置確認，修正，場合によっては一日総廃液量の制限が必要であると考えられた．

21 原発性胆汁性肝硬変に対する Bezafibrate の治療効果

渡辺 庄治・市田 隆文・高橋 達
石原 清・朝倉 均

新潟大学第三内科

UDCA 抵抗性の無症候性 PBC 7例に，UDCA と Bezafibrate の併用投与を2年以上行い，血液